

二九
氏施
問對
講義

施問 對講義 零本一卷二帖

茨城 彰考館藏

著者 金施子美撰。

裝釘 折帖。もと卷子か。

刊寫 寫鎌倉期。未點あり。

界行 欄高七寸五分、一張長一尺四寸八分。十九行、行間約八分、一行十五字。

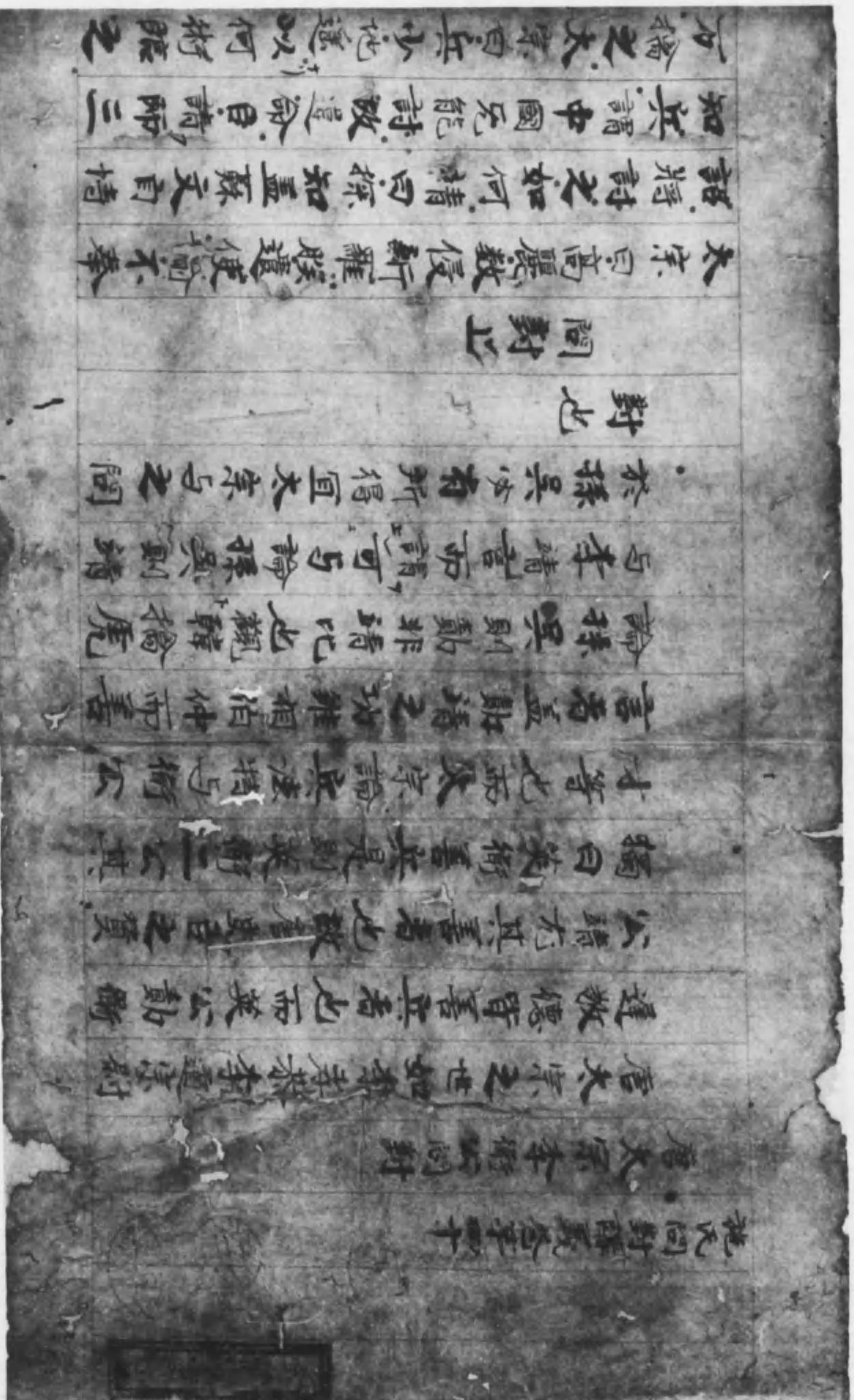
存關 卷四十のみ現存、之を上下二帖に分つ。上廿八葉、下廿四葉。

印記 「彰考館」。

來歴 金澤文庫重郭葉印第三號印巻の首尾にあり、兩者とも印記の上を磨擦したる跡ありて鮮明ならず。

備考 「彰考館目録」に「太宗問答金澤本太宗與李諱問答」とあり、題簽にも「太宗問答」とあれども、巻の首尾には「施子問對講義第四十」とあり。直享の頃架蔵に入りたるものならんも、來歴分明ならず。

此に影出したるは、巻の首尾なり。



圖版 第四八

何力又皆蕃臣之知兵者其為山川

道路蕃情逆順况不知之也以是而

統之亦足以勝其任矣太宗一聞其

言遽以請為知人則以古人以蠻夷

攻蠻夷之說而嘉之若請者豈不為

善擇人乎郭子儀嘗誘回紇以攻突

厥卻使唐祚復興正有得於以夷夷

攻蠻夷之說也乃若請之所言亦不

為兄得於此

施氏問對講義第四十

三〇 齊民要術

齊民要術 殘本九卷九軸

東京 尾張徳川黎明會藏

著者 後魏賈思勰撰。

裝釘 卷子。

刊寫 寫鎌倉期。裏に實時時代の文書五十餘通あり。筆者はこの紙背を利用して書寫したるものなり。

界行 欄高七寸。行間八分、一行十五字。

存關 全十卷の内、第三卷の一軸闕。

印記 「御本」。

題跋 金澤文庫重郭墨印(第六號及第九號印)首尾にあり。第二、五、七の三卷は第九號印、他は第六號印なり。

來歴 卷毎に奥書あり(金澤文庫古書目録參照)。

日、越州刺史(實時花押)とあり。小川僧正は松殿師家の息、極樂房承澄、京都小川御所に住み、弘安五年寂、

壽五十八。尾州家駿河御讓本書目中に入る。「台徳院殿御實紀」卷十八に「廿六日慶長十七年四月相國寺民西堂

駿府に參り、春秋左氏傳三十卷、齊民要術十卷獻じ奉る駿府政事録」とあり、是か。

備考 此に影出したるは、第一卷の首及第十卷の尾なり。

金澤文庫



齊民要術序

史記曰齊人無蓋藏如淳注曰齊無貴賤故謂之齊人若古今言平人也

後魏高陽太守賈思勰撰

蓋神農爲耒耜以利天下堯命四子劬
授民特舜命后稷是爲政首禹制士田
萬國作人^大殷周之盛詩書所述要在安
民富而教之管子曰一農不耕民有飢
者一女不織民有寒者倉廩實知禮節
衣食足知榮辱丈人日四體不勤五穀

<p>色仍建芳翁八月號如 黑色取</p>	<p>食之皮核滋味醋出丸莫天趾</p>	<p>金澤文 卷第十</p>
<p>曆民要術卷第十</p>		
<p>介</p>		
<p>寶治二年八月七日自康樂寺 僧正之手傳取之</p>	<p>曲藥推助物在 仁安元年八月晦於百奇寺二庫奉 摺介書</p>	<p>仁安元年二月十日七日及授</p>
<p>第一卷小川給</p>		
<p>萬壽自京師之法</p>		
<p>卜于始之旨寺後</p>		
<p>今可也子如十辛</p>		
<p>之月也</p>		
<p>辨別物</p>		

圖版 第五一

鎌倉明聖川德張尾・京東

〇三 曆民要術 (二册)

三一 諸病源候論

諸病源候論 五十卷首一卷十四冊

宮内省圖書寮蔵

著者 隋巢元方撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋。鈔補あり。

界行 左右雙邊。郭高六寸四分、横四寸二分半。每半葉十四行、一行廿三字。

存關 完。但第四十至四十三の四卷は補寫。

印記 「養安院藏書」「九折堂山田氏圖書之記」「森氏開萬冊府之記」。

全澤文庫重郭印第七號印。首にのみあるもの卷三九十五廿二冊八四十五の七卷。尾にのみあるもの第二八十四廿一冊七四十四五十の七卷なり。印の捺方より推考するに、もとは八卷又は九卷のものなりしならん。かくの如く改綴すれば、各冊概ね首尾印記あること、なる。

題跋

「經籍訪古志」によれば、安政頃までは懷仙閣曲直瀬正珪及酌源堂伊澤氏の架蔵にありたるもの、如し。

來歴

此に影出したるは、第十五卷の首なり。

備考

諸病源候論卷十五
五藏六府諸府八十三門

肝病候	心病候	養
肺病候	腎病候	脾病候
小腸病候	胃病候	大腸病候
膀胱病候	三焦病候	五藏橫病候
脾脹病候		
肝病候		

金澤文庫

肝象木王於春其味酸其神魂魄其候目其華在爪其充在筋其聲呼其臭臊其味酸其液泣其色青其藏血足厥陰其經也與膽合為府而主表肝為藏而主裏肝氣盛為血有餘則病目赤兩脇下痛引小腹善怒氣逆則頭眩耳聾不聰頰腫是肝氣之實也則宜瀉之肝氣不足則病目不明兩脇拘急筋羸不得太息爪甲枯面青善悲恐如人將捕之是肝氣之

圖版 第五二

三二 備急千金要方

備急千金要方 卅卷目一卷卅三冊

東京 伯爵上杉憲章氏藏

著者 唐孫思邈撰、宋林億等校。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋初年。補刻多し、又鈔補あり。

界行 左右雙邊。郭高六寸五分至七寸四分半。每半葉十三行、一行廿三字。

存關 完。

印記 「宋澤藏書」。

金澤文庫重郭墨印(第七號印)。首にあるもの第一・三・五上六上七九十一・十三十五下十八廿廿二廿四廿六廿九の十五卷。尾にあるもの第二五下六下八下十下十二下十五上十七十九廿一廿三廿五廿八卅の十四卷。第四にも尾印ありたるならんも、第三丁以下鈔補にて之を調く。第十四十六廿七の三卷は首尾印なし。依つてその組合せを考ふるに、もとは十五冊に分冊せられたるもの、如し。かくの如く改綴すれば、概ね首尾印記あること、なる。

題跋

書面の蓋の裏に云。此宋版千金要方は、元米米澤好生堂へ御渡之處、病院にて賤價を以て醫家水野道登へ拂帳由、然るに明治十七年水野家より正金九拾圓にて購求之上、元商社量を以東京へ爲差登今日に及たるものなり云々。

來歴

前項の論語にてや、明かなるも、如何にして米澤侯の架蔵に入りたるかは不明なり。

備考

江戸醫學館覆刻本の原本なり。此に影出したるは、目錄の首及第二の尾なり。

備急千金要方目錄	大澤藏書
朝奉郎守常兼秘閣校理左衛門少輔權衛尉藤原良徳等校正	
卷第一 序例	
大醫習業第一	
大醫精誠第二	
治病略例第三	
診候第四	
處方第五	
用藥第六	
合和第七	
服餌第八	
藥論第九	
卷第二 人方上	

右四味切猪肪炙不須洗泡酒十二升合煮數藥
成絞去滓適寒温分五服即乳下飲其間相去須臾一飲
令藥力相及

治婦人乳無汁單行異骨湯方

異骨五兩以水六升煮取四升一服六合日三亦可

燒作灰水服方寸匕日三

治婦人乳無汁方

栝樓根_三 石鍾乳_四 漏蘆_三 白頭翁_常

滑石_常 通草_常

右六味治下篩以酒服方寸匕日三

治婦人乳無汁甘草散方

甘草_{一斤} 通草_{三斤} 石鍾乳_{斤十} 雲母_{斤兩}

屋上散草_{二升} 牡蠣_{二斤}

右五味治下篩食後温湯煮服方寸匕日三乳下止

又方

土瓜根治下篩服半錢匕日三乳如流水

備金匱要方卷第二

金澤史庫

圖版 第五四

三
三
外
臺
祕
要
方

外臺祕要方 殘本十一卷十一冊

宮内省圖書寮蔵

著者 唐主蘇撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊(南宋)。

界行 左右雙邊。郭高六寸五分、横四寸五分。每半葉十三行、一行廿四字。

存關 全四十卷の内第三六・九十一・廿一・廿二・廿三・廿五・廿六・廿七・廿八の十一卷現存。

印記 金澤文庫重郭墨印第六號及第七號印(概ね各卷の首尾にあり。第六廿六廿七は第七號印。他は皆第六號印を使用す。

題跋 無。

來歴 慶長七年徳川家康公が富士見亭文庫に移出したるものならん。

備考 此に影出したるは、第六の尾なり。

前胡 <small>七分</small>	枳實 <small>七分</small>	桂心 <small>五分</small>
乾薑 <small>五分</small>	吳茱萸 <small>五分</small>	茯苓 <small>四分</small>
芍藥 <small>四分</small>	厚朴 <small>十分</small>	橘皮 <small>七分</small>
大黃 <small>七分</small>	杏仁 <small>七十分</small>	杏仁 <small>七十分</small>

右十一味擣篩爲末内杏仁脂中研調節度蜜和丸黍服
 食後少時酒飲任性初服七丸如梧子以氣宣下洩爲度忌
 生葱大醋並出第十七卷中

必効理中散主食後吐酸水食羹粥酪劇方

乾薑兩一 食茱萸兩二

右二味作散酒服方寸匕日三温服勿冷服之當醋水差于
 金同出第二卷中

外臺祕要卷第六

金澤文庫

右迪功郎充兩浙東路提舉茶鹽司幹辦公事張 真 校勘

三
四
類新
要編
圖
註
本
草

新編圖註本草 四十二卷序例五卷目一卷廿二冊

宮内省圖書寮藏

著者 宋許宗奭撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋。目錄末に「建安余彦國刊于勵賢堂」の木記あり。

界行 四周雙邊。郭高六寸四分、横四寸四分。每半葉十行、一行十九字。

存關 完。

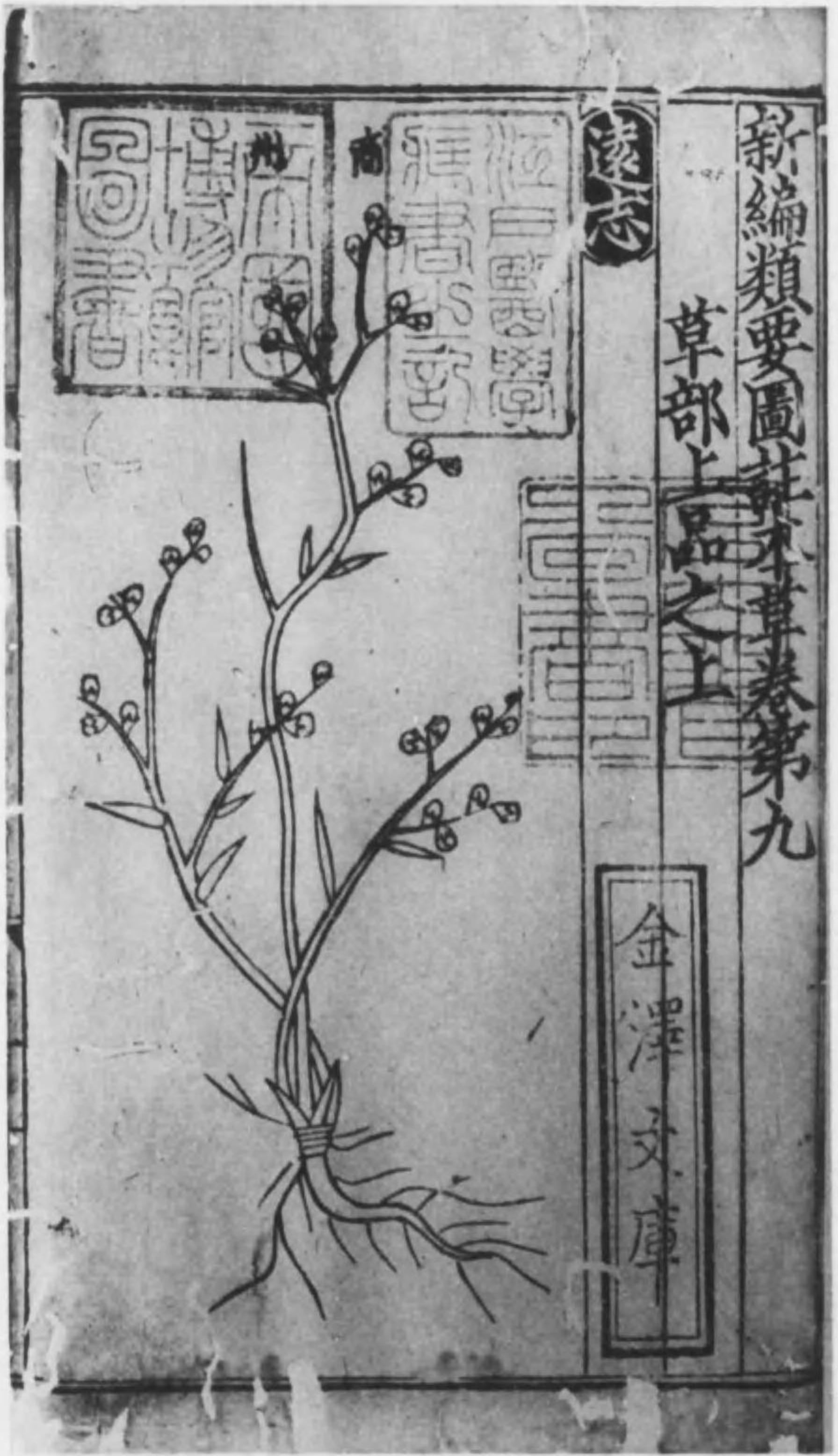
印記 「多紀氏藏書印」「江戸醫學藏書之記」「帝國博物館圖書」「宮内省圖書印」。

全澤文庫重郭墨印二種(第六號及第七號印首にあるもの總目序一・二・五・九・十三・十九・廿二・廿五冊冊四冊七の十二卷。尾にあるもの序五・八・十二・十五・廿一・廿四冊六・四・十二の九卷なり。踏印によつて卷の組合せを考ふるに、この書は今廿二冊あれど、もとは總目の外に十三冊のものなりしが如し。

題跋 無。

來歴 藏書印によつて略之を推知することを得。最近に博物館より圖書寮に入りたるものなり。

備考 此に影出したるは、第九の首なり。



四三 本草註圖 藏書寮圖書内省

圖版 第五六

三五

重政和經史證類備用本草

重修政和經史證類備用本草

零本二卷二册

愛知 岩瀬文庫藏

著者 宋唐慎微撰、曹孝忠校。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊朝鮮活字。

界行 四周雙邊。郭高八寸五分半、横五寸六分。每半葉十行、一行十九字。

存關 全册卷の内、現存第六、八の二卷のみ。

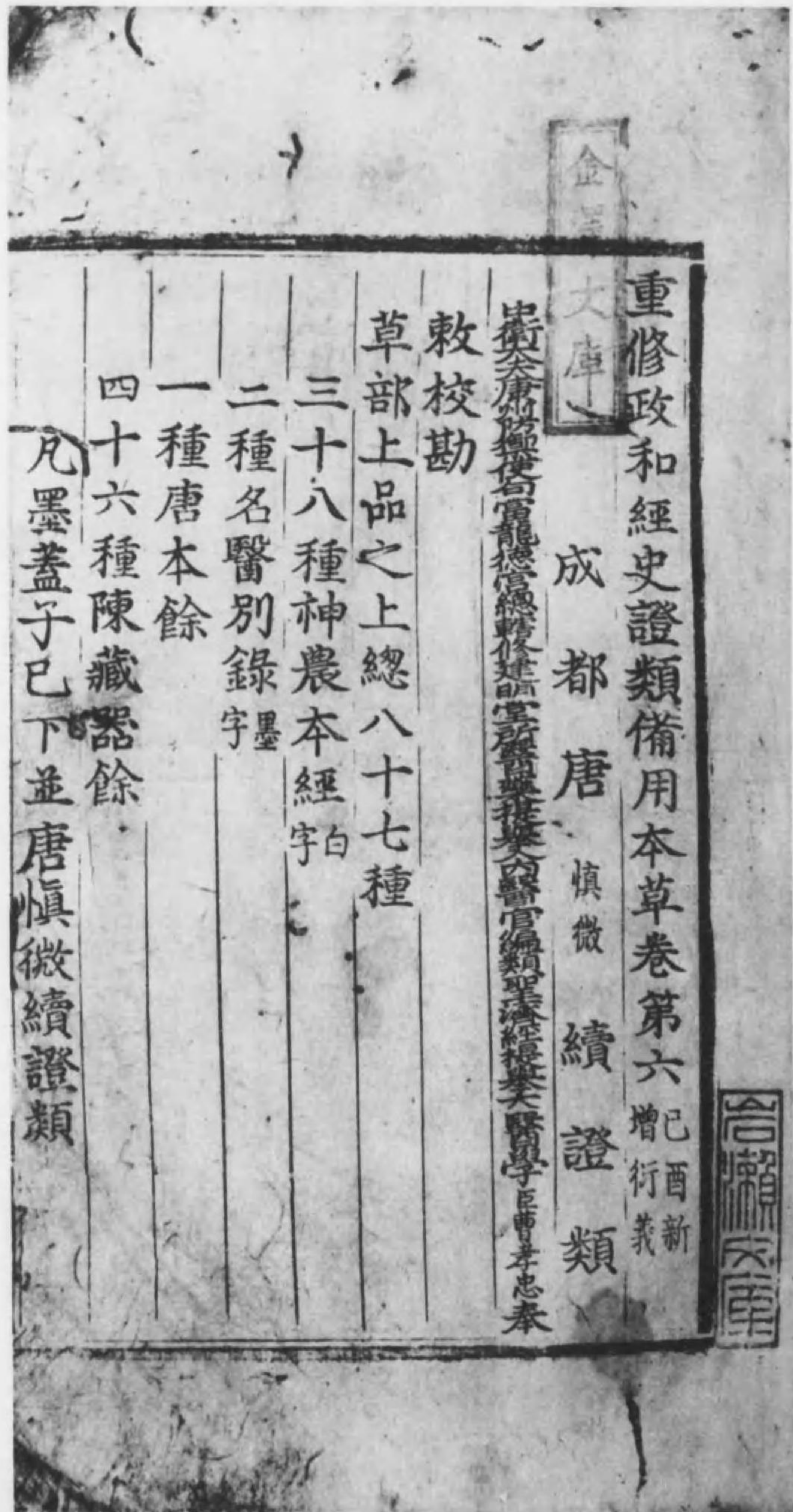
印記 「岩瀬文庫」。

金澤文庫重郭朱印(第廿二號印)第六卷の首尾及び第八卷の尾にあり。成實堂文庫藏「孔子家語」にあるものと同じ、後人の妄か。

題跋 無。

來歴 昨田仲存舊藏なり。仲存は翠山又翠岳と號す、紀伊の人、醫家にして博物に通ず、安政六年歿、六十八歳。

備考 此に影出したるは、第六卷の首なり。



圖版 第五七

三六 太平聖惠方

太平聖惠方 百卷目一卷五十一册

東京 尾張徳川黎明會藏

著者 宋太宗撰。

裝釘 袋綴。目錄及第一卷を除き、他は總て二卷を一冊とす。

刊寫 刊南宋初年。鈔補あり。

界行 左右雙邊。郭高七寸一分、横四寸三分。每半葉十三行、一行廿五字。

存關 第一目錄一至四十一至十六十九至廿四廿七至卅二卅五至四十四四十七四十八五十五至五十八六十七六十八七十一至七十四八十五八十六八十九九十九三十九四十九七十九八十八の五十二卷廿七冊は鈔補なり。

印記 「御本」。

金澤文庫重郭聖印(第六號印)概ね刊本各冊の首尾にあり。

題跋 無。

來歴 尾州徳川家の駿河御讓本。慶長七年徳川家康公によつて富士見孝文庫に移出せられたるものならん。

第十二卷の尾に『包桑翁句讀』の書入あり。包桑翁未得考。

備考 此に影出したるは、第廿五の首なり。

金澤文庫

太平聖惠方卷第二十五 凡七門 方共計二百二十六道

治一切風通用圓藥諸方 三十道

治一切風通用散藥諸方 二十道

治一切風通用煎藥諸方 十五道

治一切風通用浸酒藥諸方 二十二道

治風腰脚疼痛通用浸酒藥諸方 十四道

治一切風通用摩風膏藥諸方 二十道

治一切風攻手足疼痛通用淋蘸諸方 十四道

治一切風通用圓藥諸方

靈寶丹方

夫人之生稟於五行皆為五味之所傷也爰自飲乳至於耄年莫不因風而損命或食而傷飽或不食而太飢或飲啜太多或乾渴乏水或食酸鹹或茹辛熱或胃熱衝風或大寒近

三七 太平聖惠方

太平聖惠方 零本五卷二册

宮内省圖書寮蔵

著者 宋太宗撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋初年。

界行 左右雙邊。郭高七寸四分、横四寸三分。每半葉十三行、一行廿五字。

存關 全卷の内、第一册卷七十三七十四第二册第四十九八十八二十の五卷現存。

印記 「多紀氏藏書印」「江戸醫學藏書之記」「宮内省圖書印」。

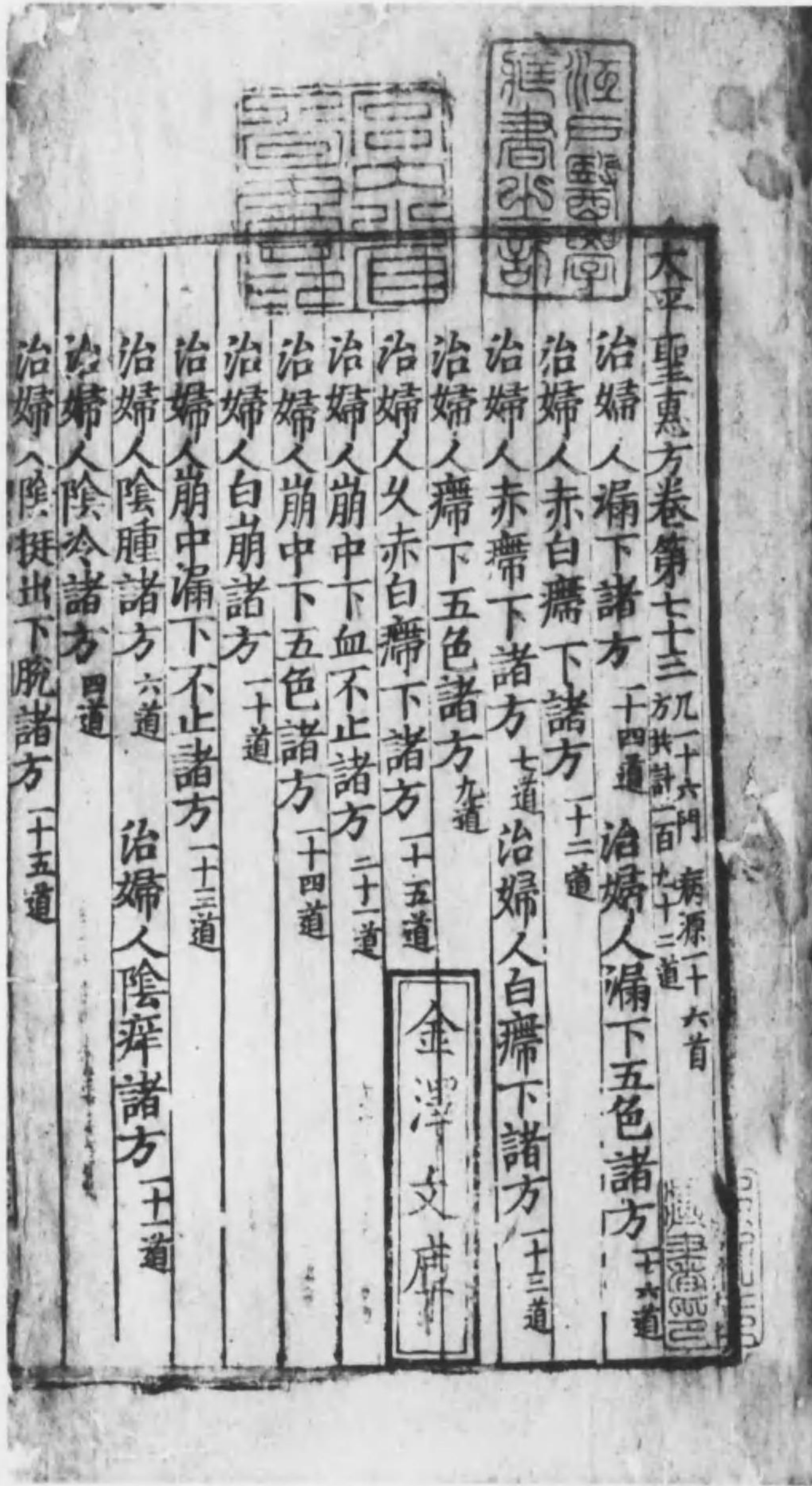
金澤文庫重郭墨印(第六號印)二册とも首尾にあり。

題跋 無。

來歴 經籍訪古志に云、

備考 此に影出したるは、第七十三卷の首なり。

備考



圖版 第五九

藏書寮書圖省內宮

方惠聖平太 七三

三八 續易簡方論

續易簡方論 六卷三册

宮内省圖書寮蔵

著者 宋・施發撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 寫室町末期。轉寫本なり。

界行 郭高六寸二分、横四寸。每半葉十行、一行十七字。

存關 完。原本所在不明。

印記 「秘閣圖書之章」。

金澤文庫重郭墨印の模寫あり、印種不明。この模寫印は首巻と第四の首と第三六の尾にあり。もし原本にもかくの如く印記ありたりとせば、もとは第一冊第一・二・三第二冊第四・五・六の二冊なりしならん。

題跋 無。

來歴 慶長七年徳川家康公に依つて富士見亭文庫に移出せられたるものなり。

備考 此に影出したるは、第六の尾なり。

續編易簡方論卷第六

醫家著書立言以貽世而厥理精微難以遽解要當明示其虛實冷熱之證使人易於適從可也王氏此方名曰易簡士大夫往往以便於觀覽故多取之然其於虛實冷熱之證無所區別謂之爲簡無乃太簡乎此予續論之作所以不能自已也區區管見若此烏知後人之不我耶溥祐癸卯夏五踰旬敬書于富室桂堂

金澤文庫

三九楊氏家藏方

楊氏家藏方 廿卷首一卷廿一册

宮内省圖書寮藏

著者 宋楊傑撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋淳熙。淳熙乙巳夏四月望日東密延聖跋あり。

界行 左右雙邊。郭高八寸六分半、横五寸一分。每半葉十一行、一行廿字。

存關 完。

印記 「帝室圖書之章」。

金澤文庫重郭墨印第七號印首卷は首尾にあれども、他は首又は尾にあり、又はなし。首印のみのもの第一五九十三十七の五卷。尾印のみのもの第四八十二十六の五卷。他は首尾になし。之を第一冊首卷第二冊第一・二・三四第三冊第五六七八第四冊第九十一・十二第五冊第十三十四十五十六第六冊第十七十八十九廿の六冊に改綴すれば、各冊首尾印を備ふること、なる。故にもとは六冊なりしが如し。

題跋 無。

來歴 慶長七年徳川家康公によつて富士見亭文庫に移出せられたるものなり。

備考 此に影出したるは、第十三卷の首なり。

楊氏家藏方卷第十三

金澤文庫

腸風痔漏方伍拾玖道
消毒圓治腸風外痔結核或痒或痛消毒定疼令結核有散

黃耆 壹兩半蜜 塗慢火炙 荊芥穗 壹兩 枳殼 參兩湯浸去瓢切 作片子麩炒黃色

薄荷葉 去土 半兩 皂角子仁 壹兩炒 令香熟

槐花 壹兩 去赤 蝸牛 拾肆枚炙 去殼焙乾

右件爲細末煉蜜爲圓如梧桐子大每服參拾圓
至伍柒拾圓茶清送下食後

聖圓子治腸風痔漏翻花脫肛歷年不差者

搥藤子 參兩重壹兩者 猪牙皂角 貳兩

四 ○ 嘉定十一年具注曆

嘉定十一年具注曆 斷簡一葉

神奈川 金澤文庫現藏

著者 不詳。
 裝釘 不詳。
 刊寫 刊南宋嘉定。
 界行 四周單邊。郭高八寸五分、横六寸八分。半葉九行。
 存開 現存半張の六。
 印記 無。
 題跋 無。
 來歴 古來文庫に傳存。
 備考 宋曆の日本他に有するものなし。長澤規矩也氏の調査により嘉定十一年具注曆の斷簡と斷す。此に影出したるは、現存の全部なり。

十六日丙辰土收翼	十八日庚申木除戌	十九日己未火建亢	二十日庚申木除戌	二十一日辛酉木滿房	二十二日壬戌水平心	二十三日癸亥水定尾	二十四日甲子金執箕
宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜
天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問	天剛五虛 自辰至戌 兵禁 章光 罪刑 天禁 忌 不宜 舉官 赴任 命將 出軍 嫁娶 營葬 開庫 受納 理察 相問
宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜
宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜
宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜
宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜	宜

藏現庫文澤金・川奈神

曆宋注具年一十定嘉 ○四

四
一
卜
華
書

卜 華 書 斷簡二葉一卷

神奈川 金澤文庫現藏

著者

裝釘

刊寫

界行

存關

印記

題跋

來歴

備考

卷子。

寫平安初期。紙背に「授菩薩戒儀」を書寫す。

欄高六寸八分。一張廿六行、行間六分半、一行十七字。

第廿三卷の尾二葉を存するのみ。

「龍」□□官印。

無。

古來文庫に傳存。

此に影出したるは、第廿三卷の尾なり。

之木為外孫景中之火為太一勝先之兄弟
 未中之火為昆弟妹氏中之火為外孫庚中
 之金為傳送從魁兄弟氏中之金為昆弟妹
 日中之金為外孫改日十二辰以觀親疏
 假令正月甲子時加辰卯會臨未上剋下者
 用將得天右傳見勾陳終於玄武以此占入
 法憂外孫事起婦女聞訟相刑傳終諫未自
 即亡財他致此



卷第廿三

式三

四二集七十二家相書

集七十二家相書 零本一卷一册

神奈川 金澤文庫現藏

著者 宋張紫芝撰。

裝釘 粘帖。

刊寫 寫鎌倉期。

界行 白郭白界。郭高六寸一分、横四寸。每半葉八行、一行概ね十七字。

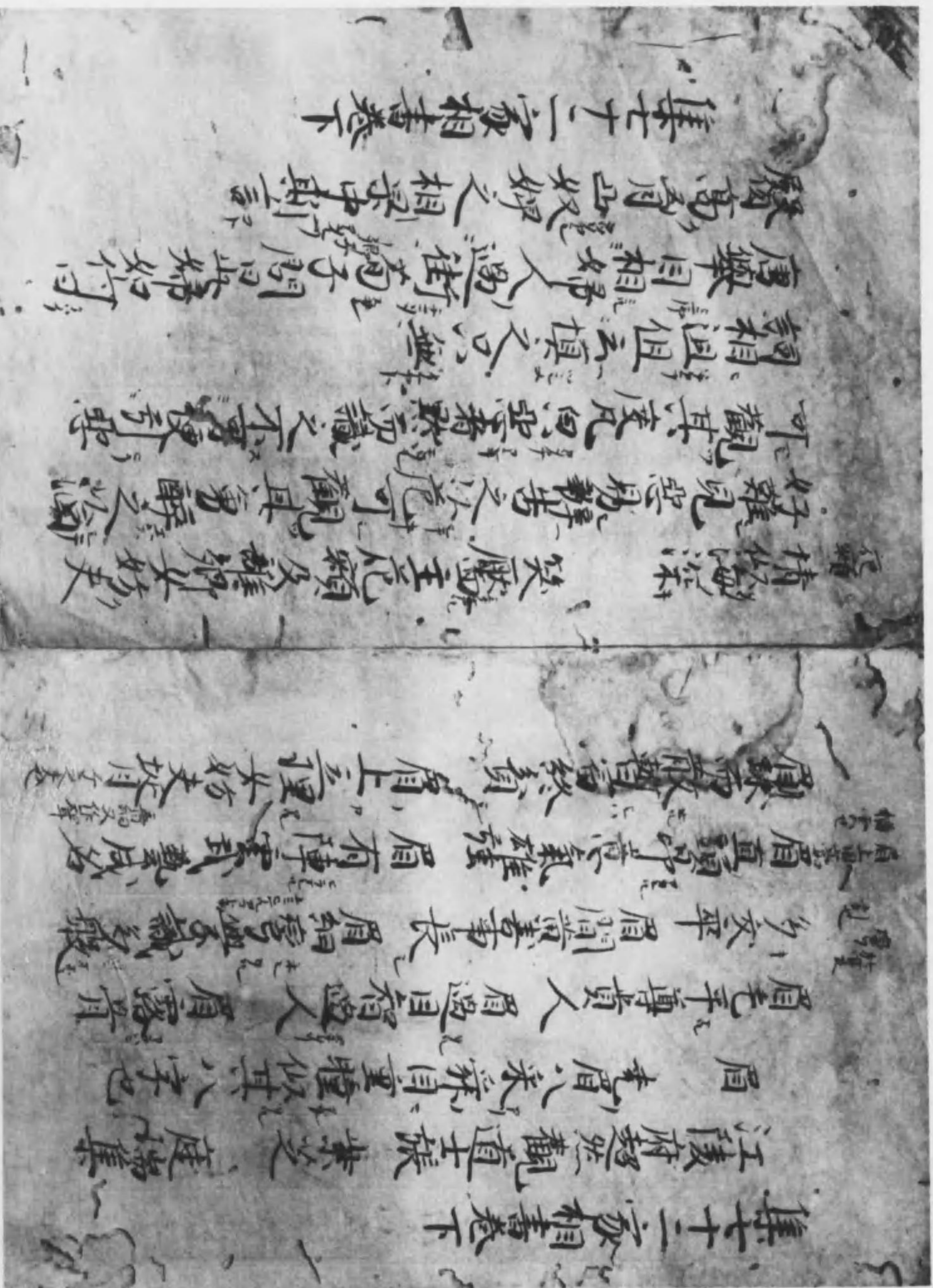
存關 全卷數不明、現存下卷一帖のみ。

印記 無。

題跋 無。

來歴 古來文庫に傳存。

備考 此に影出したるは、下卷の首及尾なり。



圖版 第六四

四三群書治要

群書治要 殘本四十七卷四十七軸

宮内省圖書寮蔵

著者 唐魏徵等奉勅編

裝釘 卷子

刊寫 寫鎌倉期。各卷筆蹟不同。

界行 欄高七寸。一葉長約一尺六寸半、一定せず。一葉十二行、行間八分、一行十七字。

存關 全五十卷の内、第四十三廿の三卷を闕く。早くより闕佚せるもの、如し。

印記 「宮内省圖書印」

題跋 金澤文庫重郭墨印(第七號及十號印) 第一卷至卅卷は第七號印、第卅一卷至終卷は第十號印なり。每卷首尾にあり。下記人名の奥書あり。括弧内はその年號を示す。清原教隆建長康元正嘉正元文應頼長寛藤原教周教綱教經經雄

來歴 (長寛)北條實時(文永)建治(金澤)貞顯(嘉元)徳治(延慶)

備考 慶長七年徳川家康公によつて富士見亭文庫に移出せられたるものなり。

此に影出したるは、第六及第卅三の首と第十五及第廿九の尾なり。跋文は留眞譜中に採録せらる。

圖版 第六五

九年楚公子圍會于鄒鄒郟 宋之
 盟也宋盟在襄 二十七年 晉祁子謂趙文子曰
 之盟楚人得志於晉後志謂魏也 今令事之
 不佞諸侯之所聞也子希或懼文如宋 楚重得志於晉之恥也吾子其不可以
 不戒父子曰楚宋之盟也子本有禍
 人之心或有人之心是楚所以爲
 於晉也以也 今或猶是心也楚又行
 僭僭 不非何咎也武將信以爲本朝而約之
 條如積夫是度是氣楚楚雖有肌體
 必豐年言料物不以年 且吾聞之陳信不爲不
 吾未歸自陳 詩曰不僭不賊雖不
 也不僭不賊 爲人則者不爲人下夫吾不墜
 難楚不爲惠也
 二年齊使晏嬰於晉林向從之軍期

春秋左傳下
 金澤文庫
 於書能存報錄業物

曰：在相蒙報目

群書治要卷第五

金澤文庫

此書一部是年竹葉冰

書字之有美也誠如

言此書純如珠玉

也子永七年十月日

卷三不少掩卷了答

唐自三年十月日

持一康皆有美年

之燦矣三年十月日

子以建武二年十月日

白 趙別對

左翼

左翼之平極月日

左翼之平極月日

左翼之平極月日

圖版第六

馬遷大常司察校尉

群書治要卷第九

嘉元四年二月十日右右奇之儀禮

已守本區豐採等此書祖文故明時

被降一部一切一書後奉少一修卷

仍書加之云

從後信上行數後奉知鼻

每 卷 天香、點說 藤川備

金華院傳抄之直竹相多是之館等

刊

西曆延五年 天香自香

讀 藤經雄

嘉元四年二月廿一日重授令年

越後守及

金澤文庫

圖版 第六七

群書治要卷第廿三 樂書經禮春秋

晏子 司馬法 孫子

晏子 旱暵

諫上

景公飲酒數日去刑被裳自鼓盆雜丸其亂

閻於左有曰仁人亦樂此樂呼梁丘

據對曰仁人之耳目猶人也走何為獨

不樂此樂也公會怒驚逐晏子晏子

朝服必至公曰寡人甚樂欲與夫子同

此樂請去禮對曰群臣時欲去禮以事

君嬰恐君之不欲也今齊國小君自中

以上力皆過聖又勝勝君然而不敢者

者畏禮義也君若無禮無以悅下若

無禮無以事上夫人之所以貴於禽獸

者以有禮也墨聞之君無禮無以禮其一

那大夫無禮官吏不奉父子無禮其

家必為詩曰人而無禮胡不遄死故禮

不可去也公曰寡人不敏無完已右滌

四
四
周易注疏其他雜抄

周易注疏其他雜抄（假題） 一卷一軸

神奈川 金澤文庫現藏

著者

裝釘 卷子。

刊寫 寫鎌倉期。

界行 欄高約八寸。眉欄あり。一葉長約一尺二寸、約十八行。一行十八字。

存關 卷首を開く。

印記 無。

題跋 無。

來歴 古來文庫に傳存。

備考

此は某書の字句を出典を挙げて解釋したるものなり。引用書には周易老子論語多く、毛詩文選太平御覽もあり。此に影出したるは、卷中の一部なり。

八卦以通神明之德以類萬物之情

云我曰近取諸身者若耳目鼻口之屬是也遠取諸物者若雷風山澤之類也舉遠近則萬事在且中矣於是始作八卦以通神明之德者言其事去為皆是神明之德若不作八卦此神明之德閉塞出隱既作八卦則万象之是通達神明之德也類萬物之情者若不作易物情難知今言八卦以類象萬物之情皆可見也

視乎天文至化成天下

貴卦曰 易三 視乎天文以察時變觀乎人文

以化成天下 解天之文則時變可知也 解人之文則化成可知也

四
五
初
學
記

初學記 卅卷十册

宮内省圖書寮蔵

著者 唐徐堅等本朝編

裝釘 袋綴

刊寫 刊南宋紹興。建本。序末に「東陽崇川余四十三郎宅今將監本寫作大字校正雖開並無訛謬收書賢士幸詳鑒焉紹興丁卯季冬日謹題」の木記あり。鈔補あり。

界行 左右雙邊。郭高六寸三分、横四寸五分。每半葉十二又十三行不同。一行廿二至廿六字不同。

存關 卷一・二・四・五・六・八・九・十三・廿一・廿八・廿九の十一卷は鈔補なり。

印記 「虎五郎文庫」「復古堂」「土屋守格之印」「龍蘭」「佐伯侯毛利高標字培松藏書畫之印」。

金澤文庫重郭墨印第七號印首にあるもの一・六・十一・十五・廿一・廿六の六卷。尾にあるもの五十四・廿五冊の六卷なり。今十冊なれども、之を五冊に改綴すれば首尾印を備ふ。故に元は五冊のものなりしならん。

題跋 無。

來歴 文政中毛利出雲守高翰の幕府獻上本の一なり。

備考 此に影出したるは、第廿一の首なり。

初學記卷第二十一

文部

金澤文庫

經典第一 史傳第二 文字第三 講論第四 文章第五

筆第六 紙第七 硯第八 墨第九

釋名曰經者徑也典常也言如徑路無所不通

者常用也曰虎通曰五經易尚書詩禮樂也古者以易書詩禮樂

三禮春秋有左氏公羊穀梁三傳與易書詩禮樂亦謂之九經

釋名言變易也帝王世紀曰庖犧氏作八卦神農重之為六十

四卦黃帝堯舜引而伸之分為二易至夏人因炎帝曰連山

人因黃帝曰歸藏文王廣六十四卦著九六之爻謂之周易又

漢書曰文王重易六爻作上下篇孔氏為彖象繫文言序卦之

屬十篇故曰易道深矣人更三聖代歷三古

與帝王世紀不同又孔氏作十篇亦曰十翼初上商為易傳云西漢傳之有

能名家者有施雠孟喜梁丘賀京房費直高相又東漢鄭玄王弼注易施

孟諸家自漢及魏並得立而傳者其衆至西晉梁丘施高三世官有案擇

四六太平御覽

太平御覽

一千卷目錄十五卷百十四册

宮内省圖書寮尊藏

著者 宋李昉等奉勅編

裝釘 袋綴。大型本なり。

刊寫 刊南宋慶元。鈔補あり。

界行 左右雙邊。郭高約七寸八分、横約五寸三分。每半葉十三行、一行廿二字。

存關 目錄十五卷、卷一至百九十三三百廿一至三百廿八四百六十至四百六十九五百四十五至五百六十六八百廿八至八百

冊四の二百四十九卷は鈔補なり。

印記 鈔補本を除き、他は每册首尾に金澤文庫重郭墨印(第三八十二號の四種印)あり。

題跋 無。

來歴 「右文故事」卷二「御本日記」に「太平御覽、兌長老本、二箱、〔附注〕全部一百十四册金澤文庫ノ墨印アリ、コ

レ兌長老ノ進本ナリ、(中略)兌長老ハ相國寺ノ承兌ナリ」とあり。一度相國寺長老承兌の架蔵に入り、後之を徳川

家康に進獻したるものなり。

備考 上海中華學藝社にて影印本印刷中なり。此に影出したるは、第二百五十九の首なり。



太平御覽卷第二百五十九

職官部五十七

太守

金澤文庫

論語子路曰善人為邦百年亦可以勝殘夫殺矣善人

有不成也百年乃能無殘暴之人

史記曰萬石君奮其父趙人也姓石氏奮長子達空申老

官皆至二千石於是景帝曰石君及四子皆二千石入臣

尊寵乃集其門號奮為萬石君孝景季年萬石君以上大

夫祿歸老于家以歲時為朝臣過宮門關萬石君必下車

趨見路馬必式焉

又曰杜周為御史大夫家兩子夾河為守

漢書曰郡守秦官也常治其郡秩二千石有丞邊郡又有

史掌兵馬秩皆六百石景帝中二年更名太守

四七 錦繡萬花谷

錦繡萬花谷

零本第十一・十二卷一册

東京 靜嘉堂文庫藏

著者

袋綴。

裝釘

刊南宋寧宗頃。

刊寫

左右雙邊。郭高六寸四分、横四寸五分半。每半葉十二行、一行十九字。

存關

前集四十卷後集四十卷續集四十卷別集册卷の内、現存七卷四册のみ。「經籍訪古志」に求古樓藏第三四十一・十二の四卷を擧ぐるも、今所在不明なり。

印記

靜嘉堂文庫藏本には、「杉垣藤珍藏記」華外「松方文庫」「靜嘉堂珍藏」外に熊形の古印あり。龍潭寺藏本には「龍潭寺」の印あり。

題跋

全澤文庫重郭景印第十二號印兩者にあり。

來歴

早く庫外に出で、一部は龍潭寺に、一部は竹添光鴻、松方文庫を経て靜嘉堂文庫に入る。經籍訪古志に卷三四、二十一・二十二の四卷を求古樓藏として著録す。

備考

此に影出したるは、序の一部及第十一の首なり。



錦繡萬花谷 七四

東京・靜嘉堂文庫藏

余為童時適當胡馬蹂踐之間又居窮鄉無
業儒者余獨肯馳而為之文籍最為難得苟
可以假鬻亦未嘗不憂憂以盡其誠以余有
書之癖每讀一篇章如小兒之於飴劑有加
而不能自止當其劇時雖夜分漏盡不之覺
也所患性魯無強記之敏誦久亦漫漶而不
牢先人既老又獨鷹門出入乎衡陽胥伍之
中而嚶呶於籩條俛仰之際如是者數年索
諸故吾子然矣其後家益貧奔走於四方為
飢寒計幸焉一温亦若隔世人夫以窮鄉亂

金華文

四
八

府類編
圖書
畫一
元龜

類編秘畫 一元龜 殘本六十九卷十八册

宮内省圖書寮藏

著者

袋綴。

裝釘

刊寫 刊南宋。建本。丙部各卷末に余仁仲の刊記あり。

刊寫

界行 乙丙丁三種不同。乙は左右雙邊。郭高六寸、横四寸二分。每半葉十五行、一行廿五字。丙は左右雙邊。郭高六寸三分、横四寸一分。每半葉十三行、一行廿五字。丁は左右雙邊。郭高六寸五分、横四寸一分。每半葉十三行一行廿五字。

存關

關卷多し。甲部全卷關。現存乙部は第十六至七十六至八十四部は第三至六十一至廿廿一、至四十四十六至五十六十一至六十五八十一至八十五。丁部は第七至廿一、至廿五、四十一至四十五、五十一至六十六計六十九卷なり。部によりて題名を異にす。乙部には「類編秘府圖書畫一元龜」、丙部には「大學新編畫一元龜」、丁部には「類編群書畫一元龜」とあり。

印記

「仁正侯長昭黃雪書屋鑒藏圖書之印」「昌平坂學問所」「淺草文庫」「御府圖書」。金澤文庫重郭墨印(第四號印)あり。「圖書寮漢籍善本書目」には、この墨印を贋鼎と疑へども、文庫現藏の「三徳指歸」にあるものと同じければ、正しき古印なりと斷す。

題跋

無。

來歴

一度市橋長昭の架藏に入り、文化五年他の宋元本廿九種(内に誤つて明刊を加ふ)と共に、昌平坂學問所に獻じたるものなり。

備考

此に影出したるは、丁部第廿一の首なり。



宮内省圖書寮藏

八四 龜一元畫 圖書寮

四
九

新增
直音
解
書
言
故
事

新增訓書言故事 十卷四册

著者 宋胡繼宗編、陳玩直訓解。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊明。第二册尾に「書林繁華熊氏刊」とあれば、明正統成化の間の刻本ならん。

界行 四周雙邊。郭高六寸四分至六寸七分不同、横四寸。每半葉十二行、一行卅六字。

存關 完。

印記 卷一の首に朱印記あれども文字不明なり。

題跋 全澤文庫重郭未印第廿二號印第一二三册の首にあり。第四册の首丁は一部破損して印記の有無不明なり。印は成書堂文庫蔵の「孔子家語」岩瀬文庫蔵の「備用本草」にあるものと同じく、古印にあらず、後人の案か。

來歴 明治卅五年頃琳瑯閣より購入すといふ。書中に「元板書言故事全澤文庫本、文行堂」の紙片を挟む。初め横尾文行堂にありたるもの、如し。

備考 書名は總目の前には首題の如くあれども、卷首は、第五卷は「廬陵胡繼宗編集書言故事」とあり、他卷は「新增訓解直音書言故事」とあり。此に影出したるは、第一卷の首なり。

神奈川 羽鳥香雲氏藏



藏氏雲香鳥羽・川奈神

五
○
世
說
新
語

世說新語 三卷敘錄人名譜各一卷五册

東京尊經閣文庫藏

著者 宋劉義慶撰、梁劉孝標注。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋初年。通編平古止點の書人あり。

界行 左右雙邊。郭高七寸二分、横四寸九分。每半葉十行、一行廿字。

存關 完。三卷の外に叙錄人名譜各一卷あるを珍とす。

印記 「誰陽王氏」「石川縣勸業博物館圖書室印」「尊經閣章」。

金澤文庫重郭墨印第六號及第十號印あり。上中には第六號印、下及叙錄には第十號印あり。

題跋 無。

來歴 延寶の頃、加州侯前田松雪公の架蔵に入り、次に一度石川縣有となり、再び前田家に入りたるものなり。

備考 前田家育徳財團影印本あり。此に影出したるは、下巻の首なり。

金澤文庫

尊經閣

世說新語下

宋臨川王義慶撰

梁劉孝標注

容止第十四

魏武將見匈奴使自以形陋不足雄遠國魏氏春秋曰武王姿

貌短小而神明英發使崔季珪代帝自捉刀立牀頭既畢令問

謀問曰魏王何如匈奴使答曰魏王雅望非常魏志曰

乃英雄也魏武聞之追殺此使

何平叔美姿儀面至白魏明帝疑其傅粉正夏月與

五
一
世
說
新
語

世說新語 三卷三册

宮内省圖書寮蔵

著者 宋劉義慶撰。梁劉孝標注。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋初年。

界行 左右雙邊。界高七寸二分、横四寸九分。每半葉十行、一行廿字。

存關 完。背經閣文庫蔵と同版なれども、後印にして叙録及人名譜の二卷を開く。

印記 「秘閣圖書之章」「市室圖書之章」。

題跋 無。

來歴 慶長七年徳川家康公が富士見亭文庫に移出したるものなり。

備考 此に影出したるは、上巻の首なり。

圖版 第七七



蔵書寮書圖省内宮

五
二
村南
輟
耕
錄

村南輟 耕 録 卅卷十册

東京 静嘉堂文庫藏

著者 明・陶宗儀撰。

装釘 袋綴。

刊寫 刊明初。

界行 四周雙邊。郭高六寸二分半、横四寸一分半。每半葉十二行、一行廿五字。

存關 完。第一卷の首は鈔補なり。

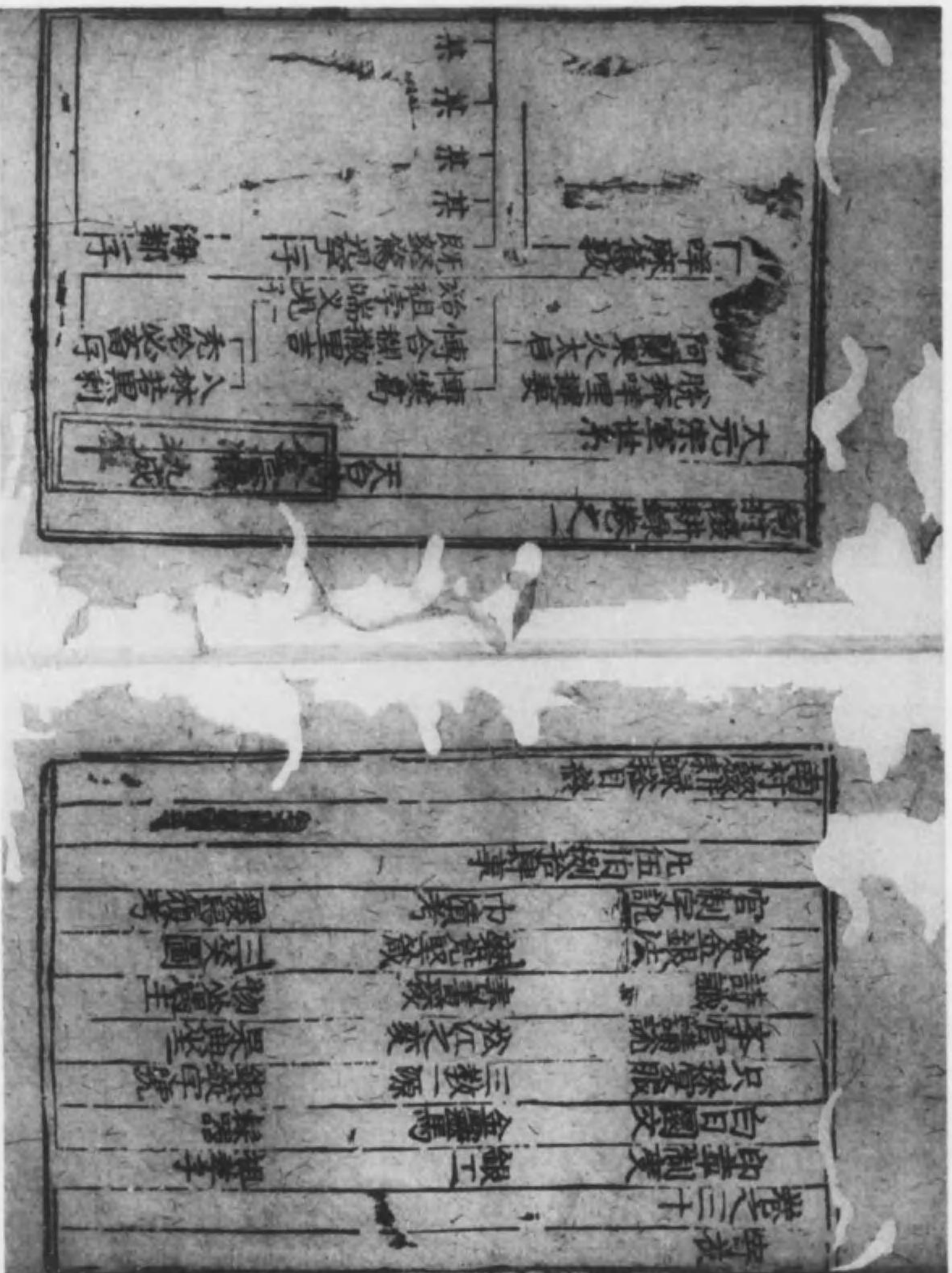
印記 「島家藏印」「野間氏藏書印」「松方文庫」。金澤文庫重郭未印第十八號印あり。隔冊の首にありて尾になし。もとは五冊にて各冊の首に印を置きたるものか。一度文庫に入りたるものとせば江戸中期前後ならん。印は未なり、古印にあらず。

題跋 無。

來歴 前表紙裏に『明治廿一年六月井々居士手裝子孫實之』とあり。裏に竹添氏の架蔵にあり、松方文庫を経て静嘉堂

備考 此に影出したるは、目録の尾及卷一の首なり。

圖版 第七八



藏庫文堂嘉静・京東

録 耕 輟 卅 二五

五
三
列

子

列

子

八卷三册

東京 尊經閣文庫藏

著者

晉張湛注。

裝釘

袋綴。

刊寫

刊南宋。通編平古止點の書入あり。

界行

左右雙邊。郭高六寸二分、横四寸一分。每半葉十行、一行十九字。

存關

完。

印記

「尊經閣章」。「石川縣勸業博物館圖書室印」。

題跋

無。

來歴

題函は前田松雲公の親筆にて、題簽は勘解由小路韶光卿權大納言、正二位、號朴所、享保十四年癸、年六十七の筆なり。早く文庫より散佚して、延寶の頃、他本と共に松雲公の手に入りたるものか。

備考

此に影出したるは、卷一序の首なり。

尊經閣

列子序

張湛字處舞

湛聞之張湛字處舞東晉光祿勳注此真經先父曰吾先君與劉正真

傳穎根皆王氏之甥也並少詩照遊外家舅始周

姓王張湛始周從疾用兄正宗輔嗣皆好乎報集

文籍先并單政得仲宣家書幾將萬卷傳氏亦世

為學門三君總名競錄奇書及長丁文遭永嘉之

亂與穎根同避難乃且南行車重各稱尺蓋力並

有所載而寇虜彌盛前途尚遠張謂傳曰今將不

能盡了忍全所載且共料音簡世所希有者各

各保錄了忍令無遺棄穎根於是音賞音其祖玄父咸

圖版 第七九

五
四
南華真經注疏

南華真經注疏 殘本五卷五册

東京 靜嘉堂文庫藏

著者 晉郭象注、唐成玄英疏。

裝釘 粘帖。

刊寫 刊南宋寧宗以後。鈔補十四葉。

界行 左右雙邊。郭高七寸五分、橫五寸二分半。每半葉八行、一行大字十五字。

存關 十卷の内、第一七八九十の五卷現存。

印記 「賜書文庫」「寶宋閣珍賞」「向書部珍藏印」「島田翰讀書記」「松方文庫」「靜嘉堂珍藏」。

全澤文庫重郭聖印第四號印每卷の首尾にあり。「經籍訪古志」に云。此本裝爲粘葉。卷首有全澤文庫火前印。

黎庶昌及楊守敬の手跋あり。(全澤文庫古書目録参照)

早く文庫を出て、新見正路賜書文庫の架蔵に入り、後に向山黃村寶宋閣珍賞向黃都珍藏印の存に歸し、次に竹添

光鴻、松方公松方文庫を経て靜嘉堂文庫に入る。

備考 此に影出したるは、第七の首なり。

南華真經注疏卷第七

金澤文庫

莊子外篇達生第十九

郭象注

唐西華法師成實疏

達生之情者不務生之所无以爲生之所无以爲

物也者分外達命之情者不務知之所无奈

何知之所無奈何者命表事也疏夫人之生也各有素分形之

賤愚智窮通一豪已上無非命也故達生於性命之

士性靈明照終不貪於分外爲己事務也一生命之

所鍾者皆智慮之所無奈之何也養形必先之以物物有

餘而形不養者有之矣知止其分物稱其生

疏物者謂資貨衣食旦夕所須夫願養身形先須

有餘而養衛不足者世有之矣有生必先无離形形不離

五
五
莊
子
注
疏

莊子注疏 斷簡二葉

京都久原文庫藏

著者 晉郭象注、唐成玄英疏。

裝釘 卷子。

刊寫 寫南北朝。調點及乎古止點あり。

界行 欄高七寸四分半。一葉十六行。一行幅七分半、十四字。

存關 現存二葉のみ。

印記 「同津館」「森氏」。

全澤文庫單郭大型墨印(第二號印)あり。

題跋 無。

來歴

備考

『經籍訪古志』に「求古樓藏」とあり。又斷簡に森氏及同津館の印記あり。此本文庫舊藏なりとせば、早く文庫を出でて狩谷及森兩氏の架蔵に入り、轉々して久原文庫の有に歸したるものならん。此に影出したるは卷の尾なり。

也。其鳴逆猶尤。匡放攝化之无為。意遠慮

物之明。智宜而上於分。吾行卻曲。无傷五

矣。曲成其行。疏。絕空也。曲狹順也。虛室其心。隨

山木自寇也。膏火自煎也。疏。寇。成也。山中

徒為有材用。揆慮。寇。伐。膏。能。明。照。以。充。燈。炬。桂

可食。故伐之。漆可用。故割之。疏。桂。心。辛

研成。漆。快。器。用。所以。割。之。漆。為。才。能。夫。於。竹。斧

而莫知无用之用也。有用則與彼為功。无

肌膚以爲天下者。天下之所知也。使百姓不失

其自全。而彼我俱適。有悅然不覺妙之在身也。

疏。秋。相。植。柳。青。大。桂。漆。斯。有。用。也。曲。棘。之。樹。高

丘之本。白。賴。之。牛。亢。鼻。之。豕。斯。无。用。也。而。世

人皆炫也。才能為有用之用。而不知文維其德

為无用之用也。故郭注云。有用則與彼為功。无

用則自全。于其生也。

金澤文庫



五
六
楚
辭
集
註

楚辭集註 零本二卷一冊

東京帝國大學附屬圖書館藏

著者 宋朱熹撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊明嘉靖。

界行 四周雙邊。郭高六寸四分、橫四寸八分。每半葉十行。一行十八字。

存關 集註八卷の内第一、二の二卷のみ現存。

印記 「臨坂氏淡路守」「八雲軒」「安元」。後の二印は蠹害のため分明ならず。

題跋 金澤文庫重郭墨印第五號印表紙裏の右下にあり、何故か郭内を薄墨にて塗つぶせり。印記稍々疑ふべし。

來歴 書中巻を括みて、『豊公征韓役分捕品之内宋槧本類珍書、八雲軒藏書印有之、臨坂家淡路守印及金澤文庫本ニヤ』と記す。

備考 此に影出したるは、目錄の首なり。



圖版 第八二

東京帝國大學附屬圖書館藏

楚辭集註 六五

五七 唐柳先生文集

唐柳先生文集並外集 零本三卷一冊

東京 靜嘉堂文庫藏

著者 唐柳宗元撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 同宋嘉定。通卷乎古止點の書入あり。

界行 左右雙邊。郭高七寸一分、横四寸七分半。每半葉九行、一行十八字又十九字不同。

存關 第廿九卷二葉、第卅二卷十葉、外集二十八葉、跋半葉のみ現存。

印記 「島田翰讀書記」「松方文庫」「靜嘉堂珍藏」。

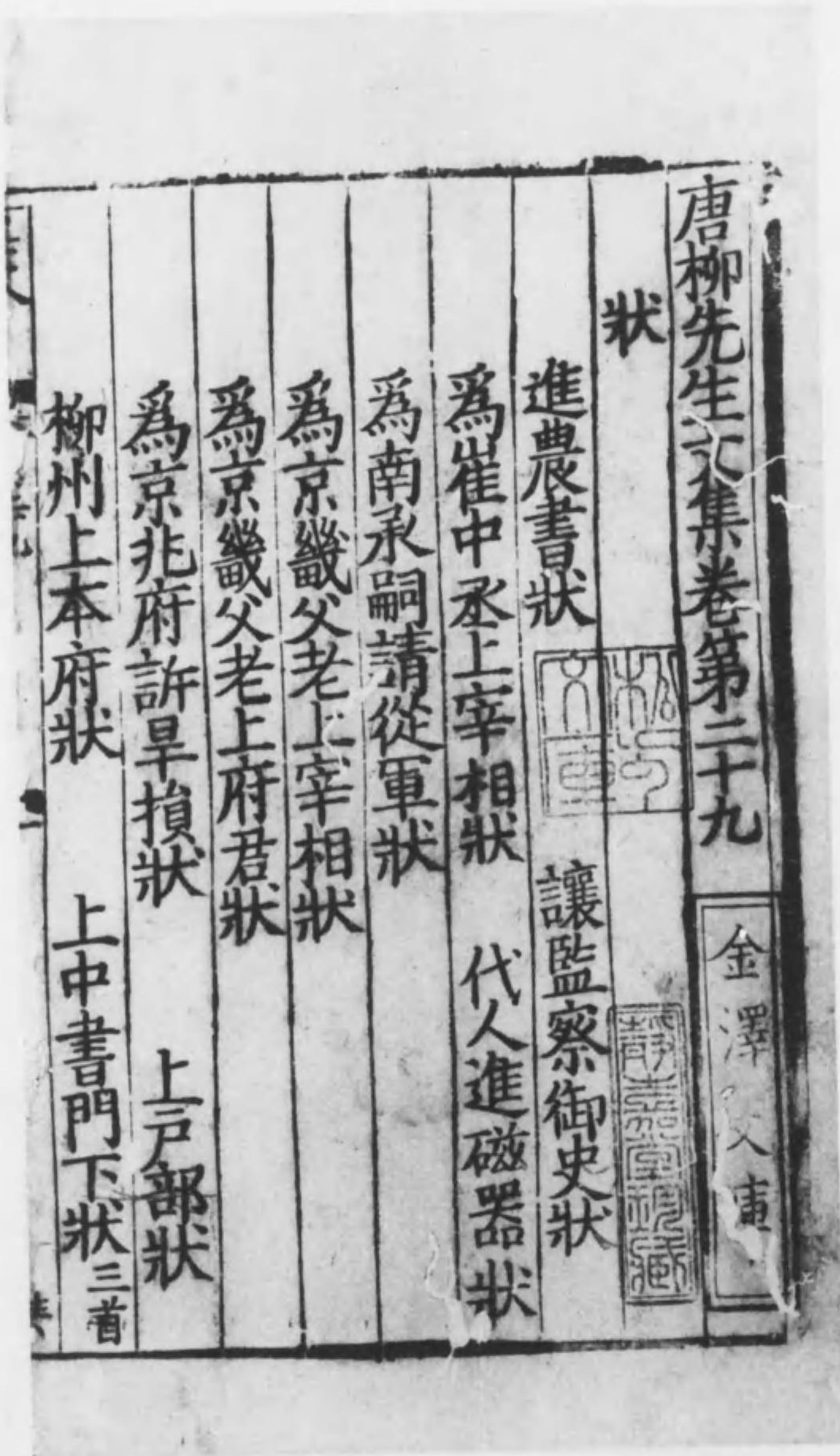
金澤文庫重郭墨印第七號印(卷廿九の首冊二の尾及外集の尾にあり)。

題跋 無。

來歴 早く文庫を出て、賜盧文庫に入り、轉々して竹添光鴻を経て、松方文庫より靜嘉堂文庫の有に歸したるものなり。

「経籍訪古志」に賜盧文庫所藏として卷十四至十八、卷廿九至卅二、竝に外集十卷の殘本を載す。此本その一部なるが如し。卷十六は留紙譜に見ゆ。

備考 此に影出したるは、第廿九の首なり。



唐柳先生文集卷第二十九

金澤入庫

狀

進農書狀

讓監察御史狀

為崔中丞上宰相狀

代人進磁器狀

為南承嗣請從軍狀

為京畿父老上宰相狀

為京兆府許旱損狀

上戸部狀

柳州上本府狀

上中書門下狀三首

五
八

釋增廣註
唐柳先生集

增廣註 唐柳先生集 四十五卷外集二卷附錄一卷十二册

東京 尾張徳川黎明會藏

著者 宋・劉禹錫編。

裝釘 袋綴。

刊寫 寫正和元年寫。手古止點あり。

界行 無邪無界。字面高六寸九分。每半葉十二行、一行廿一字。

存關 完。

印記 每冊首に「御本」、每冊首尾に「尾山」。

題跋 卷四十三尾に云「此詩兩卷漏談後移朱點而已」。正和元年十一月九日志於武州金澤之學校、近江州人事聽達行年三十

三。附錄尾に云「朱」正和元年十月三日講畢、遺四十二三之卷。正和元年九月廿七日於武州六浦金澤學校書寫畢、但中

間四十二三遺之、追可書獻、江州貫人破納聽達三十三平誌之。金澤學校の文字あること珍とすべし。惟ふに當時金澤文

庫の名天下に喧傳し、四方より來り學ぶ者甚多く、自ら學校を以て稱せらるゝに至りしものならんか。

慶長七年徳川家康公により文庫より移出せられ、後尾州徳川義直公に分譲せられたるものなり。即駿河御讓本の

一なり。

備考 此に影出したるは、卷四十三及附錄の尾なり。

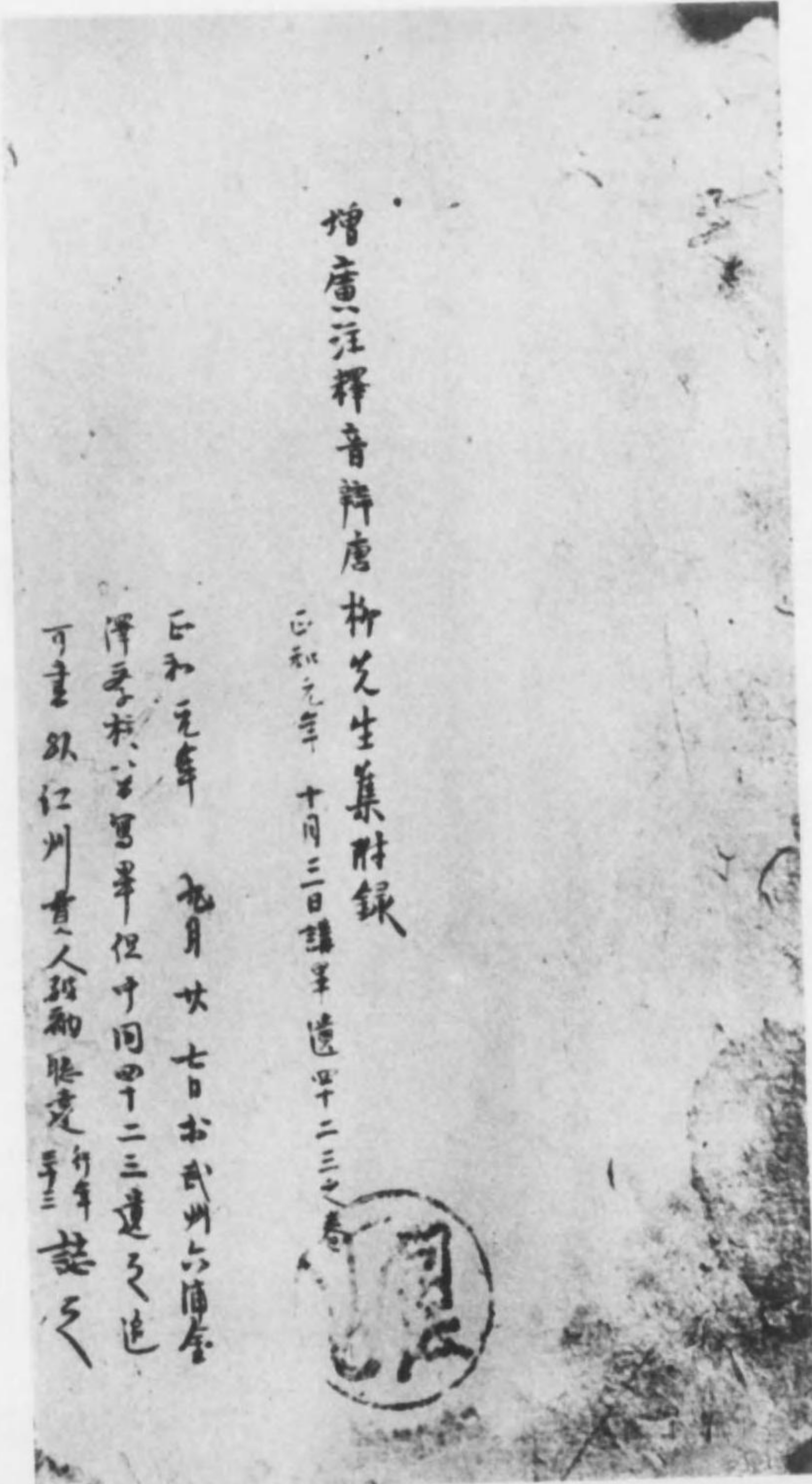
悠故池水空待灌園人

增廣註釋音辨唐柳先生集卷之四十三

以神兩卷漏談後移朱
點而已

正和元年十一月九日志於武州金澤之學校
近江州人事聽達行年三十三

八五 唐柳先生集 (一其) 東京・尾張徳川黎明會藏



藏會明黎川德張尾・京東 (二共) 集生先柳唐 八五

五
九
元
氏
長
慶
集

元 氏 長 慶 集

斷簡第卅七卷一葉
 零本(第四十四・四十一・四十二・三卷一冊)
 零本(第四十三・四十四・四十五・四十六・四十八・四十五卷一冊)
 神奈川 金澤文庫現藏
 東京 靜嘉堂文庫藏
 東京帝國大學附屬圖書館藏

著者

唐・元稹撰。

裝釘

粘帖又袋綴。もとは總て粘帖か。

刊寫

刊南宋。

界行

左右雙邊。郭高七寸、横四寸九分。每半葉十三行、一行廿三字。

存關

全六十卷の内、九卷現存。

印記

靜嘉堂文庫藏本には、「存心堂珍藏」「島田翰讀書記」「松方文庫」「靜嘉堂珍藏」あり。東京帝國大學附屬圖書館藏本には、「賜盧文庫」「不忍文庫」「榎堂經眼」あり。

題跋

無。

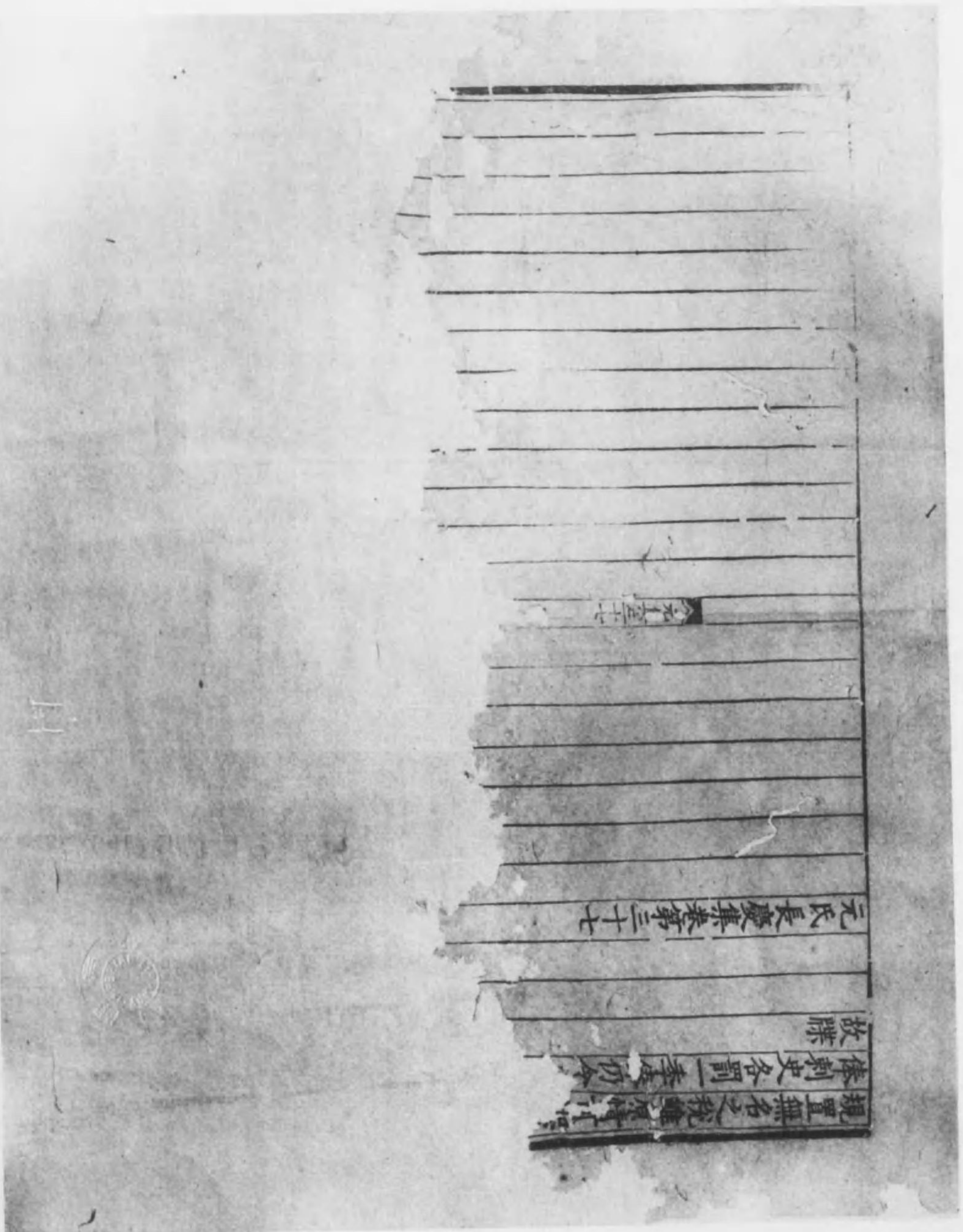
來歴

以上九卷を通じ金澤文庫印記なし。されど「賜盧書院儲藏志」に「此殘本金澤文庫ノ舊藏ナリ」と記す。三種を比較するに皆同版にして卷數亦相近し。思ふに早く庫外に佚出して四方に散在せるものならん。卷四十前表紙裏

備考

此に影出したるは、第卅七の尾・四十の首及四十三の首なり。

圖版 第八六



元氏長慶集卷第三十七

親置無名之稅
 俸剝史各罰一季
 故牒

元氏長慶集卷第四十

制誥

冊文武孝德皇帝赦文

處分幽州德音

戒勵風俗德音

制誥序

制誥本於書書之誥命訓誓皆一時之約束也自非訓導職
 業則必指言美惡以明誅賞之意焉是以讀說命則知輔相
 之不易讀省征則知廢怠之可誅秦漢已來未之或改近世
 以科試取士文章司言者苟務剏飾不根事實升之者美溢
 於詞而不知所以美之之謂黜之者罪溢於紙而不知所以
 罪之之來而又拘以屬對踳以圓方類之於賦判者流先王
 之約束蓋掃地矣元和十五年余始以祠部郎中知制誥初
 約束不暇及後累月輒以古道干丞相丞相信然之又明年

元氏長慶集卷第四十三

制詰

授李愿檢校司空宣武軍節度使制

授劉悟檢校司空幽州節度使制

授劉悟昭義軍節度使制

加陳楚檢校左僕射制

授馬總檢校刑部尚書天平軍節度使制

授田布魏博節度使制

授李愿檢校司空宣武軍節度使制

門下昔者魯侯伯禽徒以周公之故遂荒大東重耳以定傾
之勞子孫不絕於晉昔我太師西平王在德宗時能復京邑
書于鼎彝每懷官廟之安實念山河之永而又繼其英哲克
今人惟弟惟兄莫非頗牧尚想德施於十代何吝恩積於

六〇 白氏文集

白氏文集

著者 唐白居易撰。

寄本(三冊六十九卷)廿一卷廿一軸 京都久原文庫藏
寄本(四冊七十七卷)廿一卷廿一軸 京都田中忠三郎氏藏
寄本(第八十四冊五十四卷五軸) 東京三井源右衛門氏藏
寄本(第三冊八二卷二軸) 東京保阪潤治氏藏

裝釘

卷子。

刊寫

寫鎌倉期。

界行

欄高七寸八分半。一葉廿至廿二行。一行幅約七分半、十四至廿字、不同。

存關

七十一卷の内、前掲の廿九卷現存すれども、第三四の兩卷は全く別本より鈔補せるもの、如し、故に金澤文庫本として認め得べきは廿七卷廿七軸なり。其の内第卅八卷二本あり、一本は別本なるが如し。尙京都竹苞樓の記録によれば、第卅三卷も一度同樓の手に入りたるもの、如くその奥書の文を記載す、又以上の存巻以外に四十二、四十三、四十八、五十七、六十一の巻数を擧ぐ、併せて同樓に入りたるものか、今その所在不明なり。

印記

三井氏藏本には「三井家雙龍圖」「三井高堅之印」「高堅子々孫々永保」「高堅」等の印記あり。

題跋

金澤文庫重訂印五種第三四六七八九十二號印あり。第八廿一廿二廿四廿八卅一卅九四十七六十五には第三號印を、第卅五、卅八には第四號印を、第六廿三卅八四十一四十七五十二六十六六十八には第六號印を、第九十二、十四十七四十一五十二五十四五十九六十三には第七號印を、第廿一廿二卅一四十九には第十二號印を使用す。一卷二種の印を使用せるものあり。第廿三卅八の二巻を除き、各巻奥書あり。(金澤文庫古書目録参照)

來歴

早く庫外に出で、一度田中勘兵衛氏の架蔵に入りたるも今五軸を存し、他は漸次久原文庫及三井保阪兩氏の有に歸したり。「経籍訪古志」に卷三四を、竹苞書屋蔵として著録す、今所在不明。

備考

此に影出したるは、第八十七冊五冊八、四十六十二の首及第六十四冊三冊一、四十七五十二の尾なり。

新雪滿前山初晴好天氣日西騎馬出忽有京師
意城柳方綴花唇冰淡結穗須莫見日暖家
符飄墜行吟省未足坐歎銷何易猶勝嶺
南雪零不到地

金澤文庫

文集卷第六

寛喜三年二月廿日

竹苞書屋

大入喜政の筆

長長三年三月廿日

金澤文庫

文集卷第八

大原白居易

古調詩

關通三

九五十四首

長慶二年七月自中書舍人出守杭州路次藍溪作

太原一男子自顧庸且鄙老逢不次恩洗

板出泥滓既居可言地願助朝達理伏閣

三上章音揚韞愚不稱有聖人存大體優儼

容不死鳳詔傳舍人魚書除刺史真懷

齊寵辱委順隨行止自我得此心于茲十

年矣餘杭乃名郡音行鄭臨江汜已想海門

祖史及殿也

體丁序又

他得及從人

音江有

圖版 第九〇

王昭君二首 時年十七

金澤文庫

滿面胡沙滿鬢風 負銷殘貨驗銷紅
愁苦辛勤顛顛盡 如今却似畫圖中
漢使却迴 寄語黃金何日贖 蛾眉
君去君向 妾顏色莫道不如宮裏時

文集卷第十四

元長三年二月廿七日

四月二十日

素禎三年三月廿日

建武丁年三月廿日

此為房書

大正七年三月廿日

文集卷第十七

江州詩

大原白居易

律詩

五言 七言

自雨韻至五十韻凡一百首

江南謫居十韻

金澤文庫

自西沉真客官馬獻納臣悲悲許國薄命不如
 人繞凌雲翅俄成共水漣葵枯猶向日逢新即
 春澤畔長愁地天邊欲老身蕭條殘活計冷落
 舊文親草合門無送煙銷誰有塵憂方知洞聖
 貧如覽錢神扇尾難容足羊腸易復輪行歲
 與通塞一切任陶然

江樓夜吟九九新律詩自成十韻

陸

有馮焉侵淫郊廓壞敗廬舍人墜摯

溺顛日本作續子論注及字也天元古平居易社奉壘書典利除

客守土守水藏典神同是由備物致誠

躬自虔禱庶俾水及于聲谷遠為陵

土不蹇崩人无蕩折敢以醴幣羊豕沉

奠于江惟神裁之無忝礼典尚饗

文集卷第廿三

金澤文庫



藏氏門前右源井三・京東

列宿選任倚寄年非不榮重然吾左右前後方求正人如鏡
 敬休不負疎遠亦猶有聲之玉元類之珠不置於佩服蒙
 極之間中非其所也守自儆守無恭吾言類可行中會中
 散官勲如故敬休可尚書兵部郎中知制誥散官勲如故

金澤文庫

文集卷第廿一

時會昌四年孟夏之月首尾上旬為書翰達此因
 借書本德廣所人儀化之

寬喜三年年十二月十六日書馬書書堂書有中

貞永二年年正月八日書中

月二十日書中

右全各樣尉存奉

嘉禎二年年正月廿五日比存子座今記
 連長中正月廿五日傳下書而以存中

文集卷第五

金澤文庫

中書制詔五 新體

凡五十道

京地尹盧士玟除常侍兼中書丞瀛莫二州觀察等使制

勅夫疆理天下壤劑四方乘時省置何常之
有故方隅未寧務先經略則專安方伯以總統
之及兵革甫息思弘風化則並命連師以系
理之朕常以幽薊一方琛封千里表迺兼廣莫
專制實難厲元戎改轅新師進律母而制盡
以叶便宜蓋王者弛張變通之要也京地尹盧

圖版 第九六



藏氏門衛右源井三·京東

(八十三第卷) 集文氏白 ○六

文集卷第廿八

太原白居易

金澤文庫

翰林

制詔二

杜佑致仕

勅書... 明哲保身進退始終不失其

道自非賢達孰能魚之司徒同平章事

杜佑以長才明略為開元臣歷事四朝殆

逾三紀出專杜頌為諸侯師入贊台家為

正室補直學士... 續中水合... 卷五元...

三井家雙鹿閣

文集卷第卅

大原白居易

翰林

制詔批答四

讀文附

凡七十五

答元戎等請上

尊師表

朕自君臨運途沐春成時豈捨元龜如來其旨宗社
降忠靈賢宣力願惟寡德敢受鴻名珥等中茲懇誠
上尊義猶雖屬人望難貪天功宜志所懷勿固為請

答薛平賀生捨李錡表

朕自嗣

朕自嗣耿光每多惕慮念必先於除害志无怠於安人
李錡大負國恩自貽天討師造未勤於壇場父子俱隸



之則同功其要者在予舉有次指有倫適其用達其
宜而已方今華夷有截內外無虞人思休和俗已平
泰是國家敦刑討之日宗禮樂之時以文易化成道易
馴致者由得其時也今則時矣伏惟 陛下而不失焉

文集卷第七

金澤文庫

貞元元年

八月三日 丙子 皇極經世一書

嘉禎二年四月廿日校唐子危

三年六月廿日 皇大入道 注月 訓方 皇多

七年比後 務也 白 於 子 前 於 人 多 送 和 上 有 何 可 也

未 下 公 送 于 都 下 一 錄 不 在 長 安 年 二 月 十 日 傳 下 貴 而 之 所 亦 重 抄 也

卷五十二

法經花經法檀妙贈胎和所似

鷲語相和

時會昌口祀夏口月二十九日 傷以惠苦

南禪院補主方北小亭子得与奈上校

白氏後集卷第五十二

金澤文庫

貞元元

天

月廿

傷

即此用字也

古詩乃所集名次多

未校幸一月廿所似現在此及原平公元集

法經花經法檀妙贈胎和所似

法經花經法檀妙贈胎和所似

白氏後集卷第六十二

雜字
拾詩 歌行 雜體

太子賓客分司東都白居易

本卷十一字元一
九十七言

詠興五首 并序

金澤文庫

七年四月予罷河南府靖履道第廬舍自結衣儲
自死無欲營戒歌戒解顏然自適蓋向洛間一幸人
也遇興發詠偶成五章各以首句命為題目

解印出公府

解印出公府 斗數塵衣百吏放 尔散繁鶴隨我
歸 未履道宅下馬入紫扉馬嘶及着權鶴家故
池鷄犬何忻 陳里亦依 車顏老去日生計 勝前

六一白氏文集

白氏文集 斷簡一葉

兵庫 嘉納治兵衛氏藏

著者 唐白居易撰。
 裝釘 卷子か。
 刊寫 寫鎌倉初期か。
 界行 欄高七寸。行間七分半、一行十三字。
 存關 第六卷首五行のみ現存。
 印記 金澤文庫重郭墨印(第三號印)あり。
 題跋 無。
 來歴 不明。
 備考 此に影出したるは現存の全部なり。



(六第卷) 集文氏白 一六

藏氏衛兵治納嘉・庫兵

六二

新板增廣
附音釋文
胡曾詩註

新板增廣 附音釋文 胡曾詩註 三卷一册

東京 安田文庫藏

著者 宋胡元質注。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南北朝。

界行 左右雙邊單邊又四周雙邊一定せず。郭高五寸七分、横三寸三分半至三寸九分不同。各半葉十行、一行十六字至廿

字不同。

存關 完。

印記 金澤文庫重郭朱印第十八號印あり、古印にあらず。

題跋 無。

來歴 大正の頃勢州松坂小津氏西莊文庫より入手す。

備考 此に影出したるは、卷一の首なり。



圖版 第一〇二

六三 景文宋公集

景文宋公集 零本十七卷六册

宮内省圖書寮蔵

著者 宋 宋祁撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋寧宗頃。

界行 左右雙邊。郭高七寸二分、横五寸二分。每半葉十二行、一行廿字。

存關 全百五十卷の内、第廿六至卅二八十一至八十五百廿五現存。

印記 「佐伯侯毛利高標字培松藏書畫之印」「秘閣圖書之章」。

金澤文庫重郭墨印第七號印あり。首にあるもの第百廿一及百廿四の二卷。尾にあるもの第卅一の一巻のみ。

題跋 無。

來歴 文政中毛利出雲守高翰の幕府へ獻本の一なり。

備考 佚存叢書本の原本なり。此に影出したるは、第百廿一の首なり。

景文宋公集卷第一百二十一

正澤文庫

啓狀

上晏太尉

比丐郡麾願嘗吏事章留公府身屬君軒雖曰見俞
久而被遣罔憚歎暑徑浮扁舟開秋之初畧事惟謹
然壽春故壤東楚劇藩務苦亂繩才由短綆益震虞
謗敢議課功加以轉側畏塗違離恩館志緣慮怯感
以事新鍛羽自驚初無虛矢危涕方墮何待鳴琴尚
賴仁人持衡至公禦侮納之德宇審於它腸幸終大
庇之私使無中道之弃淮山千里城闕九畿官箴有
常竊恨無訖臨風伏紙言不能宣

回臺直李池

六四 歐陽文忠公集

歐陽文忠公集 百五十八卷卅九册

京都 伊藤孝彦氏藏

著者 宋歐陽修撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋。

界行 左右雙邊。郭高六寸八分半、横五寸一分。每半葉十行、一行十六字。

存關 完。但し第八十六・七十八の全部及第九十一・四の全部は鈔補なり。

全卷卅九册とあれども、第十八十九は合冊しあれば、實は卅八册なり。

「庶昌始毛鈔氏藏書子子孫孫其永寶用」。

印記 金澤文庫重郭墨印(第六號印)每冊首尾にありたるが如きも、第六冊第廿九卷の尾に唯一簡を残して、他は總て之を

切取りたる痕跡あり。

題跋 第八冊の尾に「享保甲寅復月伊藤長堅補寫」第十七冊尾に「乙卯八月長堅補寫」第卅九冊尾に「明和八年辛卯三月十七日讀了 東所」の識語あり。

來歴 早く文庫を出でて伊藤氏の架蔵に入りたるか。

備考 此に影出したるは、第二の首なり。

居士集卷第二 歐陽文忠公集二

古詩二十首

送楊闢秀才

吾竒曾生者始得之太學初謂獨軒然百
鳥而一鷄既又得楊生羣獸出麟角乃知
天下才所識慚未博揚生初誰師仁義而
禮樂天姿樸且茂美不待追琢始來讀其
文如渴飲醴一作醴既坐即之談稍稍吐
鋒鏘非唯富春秋固已厚天爵有司選羣
材繩墨困量度胡爲謹毫分而使遺磊落

六五 王文公文集

王文公文集 殘本七十卷十四册

宮内省圖書寮尊藏

著者 宋王安石撰。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南宋紹興。

界行 左右雙邊。郭高六寸七分、横四寸七分。每半葉十行、一行十七字。

存關 序目關。原一百卷か。今卷七十までを存す。

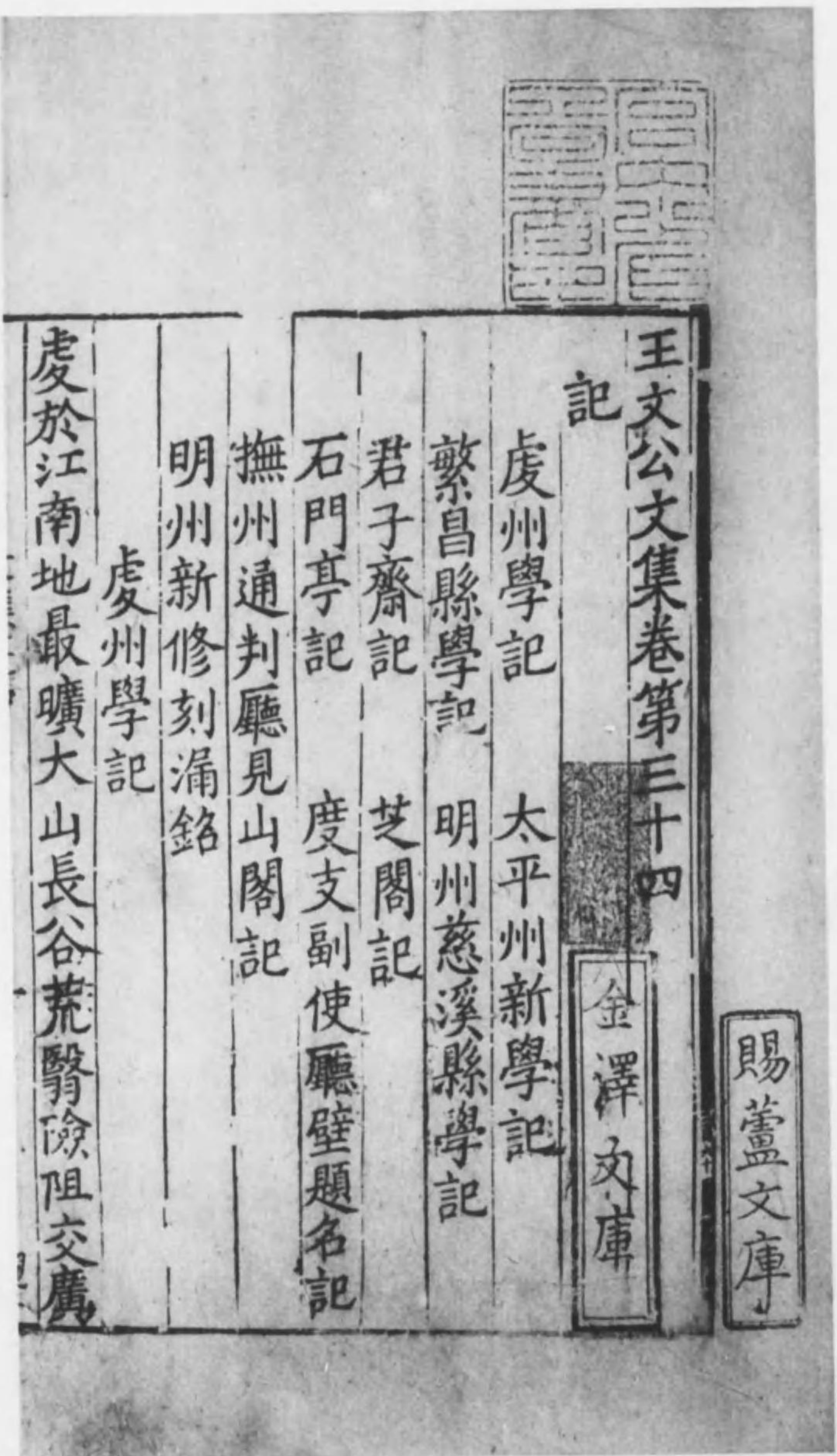
印記 「顔氏家藏」「心華藏書」「賜蘆文庫」「宮内省圖書印」。

金澤文庫重郭墨印(第七號印あり。第三六の二冊を除くの外、總て首尾にあり。

題跋 無。

來歴 賜蘆文庫舊藏。

備考 「此に影出したるは、」第卅四卷の首なり。



賜蘆文庫

金澤文庫

王文公文集卷第三十四
記

虔州學記 太平州新學記

繁昌縣學記 明州慈溪縣學記

君子齋記 芝閣記

石門亭記 度支副使廳壁題名記

撫州通判廳見山閣記

明州新修刻漏銘

虔州學記

虔於江南地最曠大山長谷荒翳險阻交廣

六
六
東
坡
集

東坡

集

殘本卅七卷後集九卷十七册

宮内省圖書寮藏

著者

宋蘇軾撰。

裝釘

袋綴。

刊寫

刊南宋。

界行

四周雙邊。郭高六寸六分、横四寸四分。每半葉十行、一行十八字。

存關

全六十卷の内、卷卅四至卅六及後集卷九以下を闕く。

印記

「越閣文學」「清絢之印」「君錦」「仁正侯長昭黃雪書屋藏圖書之印」「淺草文庫」「昌平坂學問所」「宮内省圖書印」。

金澤文庫重郭墨印(第六號印)あり。

題跋

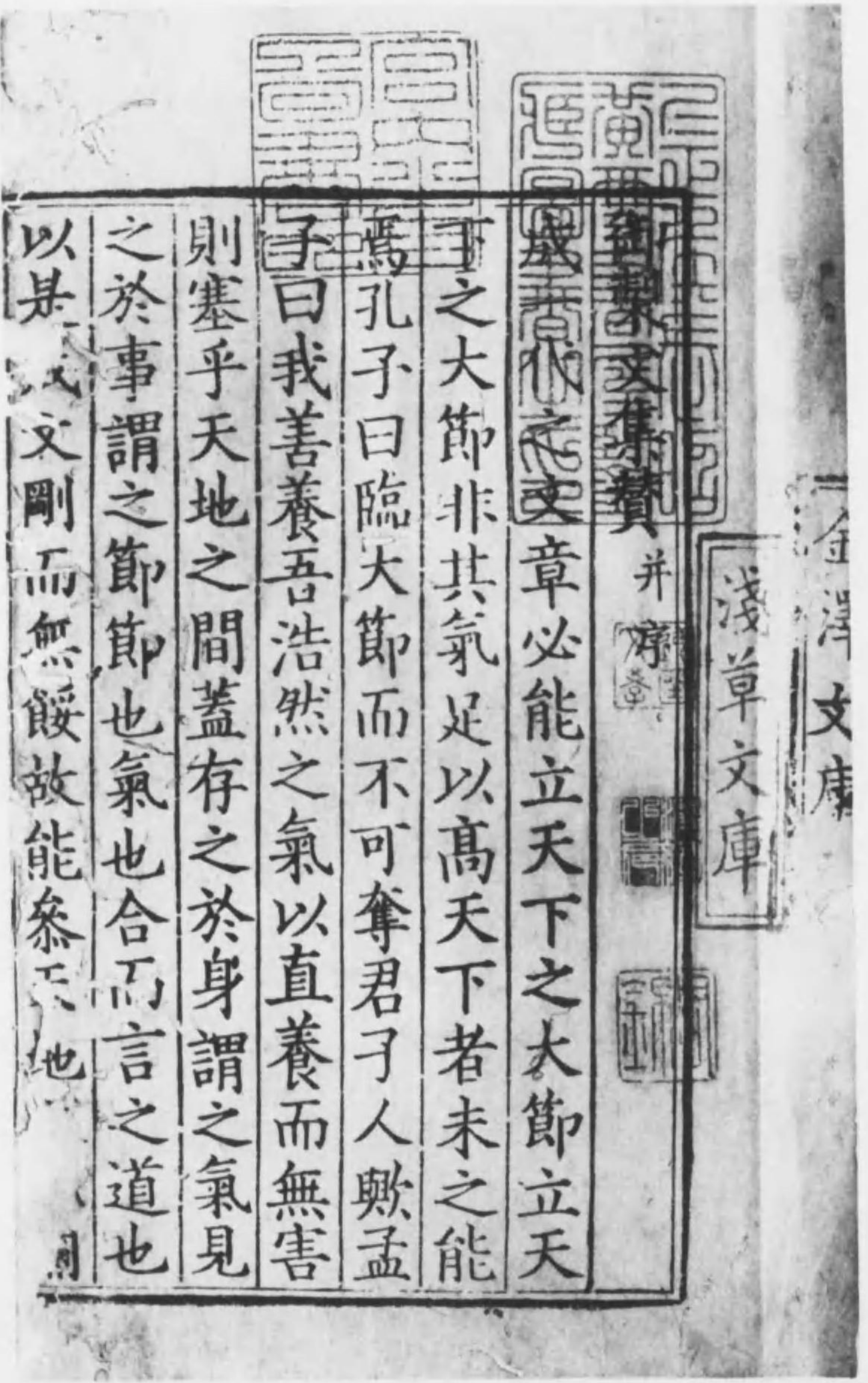
無。

來歴

備者清田君錦舊藏。文化五年下總守市橋長昭その所藏にかゝる宋元版卅種を幕府に獻す。此本はその一なり。尾

備考

此に影出したるは、第一卷の首なり。



圖版第一〇六

之大節非其氣足以高天下者未之能
 焉孔子曰臨大節而不可奪君子人歟孟
 子曰我善養吾浩然之氣以直養而無害
 則塞乎天地之間蓋存之於身謂之氣見
 之於事謂之節節也氣也合而言之道也
 以是文剛而無餒故能參天地

淺草文庫

并序

六
七

王狀元集
諸家注分類
東坡先生詩

王狀元集 諸家注分類 東坡先生詩 廿五卷十四册

宮内省圖書寮尊藏

著者 宋・蘇軾撰、劉辰翁評。

裝釘 袋綴。

刊寫 刊南北朝覆宋。

界行 左右雙邊。郭高六寸六分、横四寸一分。每半葉十一行、一行十九字。

存關 完。

印記 「侯堂藏書記」「樂亭文庫」「白河」「宮内省圖書印」。

全澤文庫重郭墨印第十四號印あり。首にあるもの第一、二、四十三、四十四の五冊。尾にあるもの第十四冊のみ。踏印の方法甚不自然なり。首尾印記のある部分脱落したるか。印も亦古印にあらず。

題跋 第廿五卷の終に、松崎樓堂の跋あり。右廣瀬蒙翁秘藏蘇文忠詩集廿五卷十四冊、余未此出以見示、蓋 皇朝錄食時雖本也、余以清見寺所藏文永本百丈清規證之、知其不妄也、文化戊寅夏五、益城松崎樓、審定印。

來歴 桑名藩舊藏。

備考 此に影出したるは、第廿二卷の首なり。



藏尊寮書同省内宮